

ウルトラQ dark fantasy

闇

「闇の顔」

「闇より来るもの」

第四稿

脚本／小中千昭

Teleplay by Chiaki J. Konaka

2004\06\14

登場人物

仙童平馬(43)……………ディレクター

酒井勝人(38)……………テクニカルD／スイッチャー

後藤美姫(28)……………局アナウンサー

長南年恵(29)……………TK

矢野祐子(26)……………照明助手

スタッフ

他スタッフ

彫刻家(台詞無し)

彫刻家の妻(台詞無し)

彫刻家の愛人(台詞無し)

★スタジオ

日下部四郎(46)……………ニュース・キャスター

明石博子(28)……………アシスタント／局アナ

他コメンテーター(台詞無し)

ナレーター

□舞台設定

廃屋となっている洋館。その室内が一切の舞台となる。

彫刻家のアトリエ件住居として使われていた。仕切りの無い広いホールの様な室内。

昭和40年代に打ち棄てられ、そのまま廃墟となっている。家具調度類は荒らされているが、僅かに残る形あるものは、その時代のもの。

目立つ調度品としては、ヒビが入った姿見大の鏡が置かれている。

奥の一角は彫刻に使っていたであろう台や工具が散乱し、石膏型や粘土が積み上がっている。

ロフトがあり、そこが住居となっていたらしい。

窓は古くに板で塞がれ、漆黒の闇の中にあっただが、今そこは、テレビ中継クルーによって、副調整室の如きに、折り畳み机の上にモニター群、スイツチャー卓、ミキサー卓が設置され、その周囲はサービス照明によって明るくなってる。

また、大仰な特機に載ったビデオカメラも一台設置されている。

□番組設定

週末夜に放映されている報道バラエティ番組『ニュース・ジャンクション』。

折からの廃墟ブームを受けて始まったばかりの不定期コーナー『日本の廃墟探訪』は、生中継で各地の廃墟を見せるというもの。

中継は局アナが持ち回りでレポートする構成。

暗い部屋に浮かぶ、モニタ群。それらは窓だ。

それに向かって座っている、TKの年恵、TD酒井、そしてPDである仙童。

彼らの背後では、三人の若いスタッフが室内に設置されたカメラの用意をしている。

酒井は基本的に常に何かしら機器を操作、調整しており、特記無い限りは仙童、年恵と視線を合わせずに会話をする。

小さなモニタ・スピーカーから、外のスタッフ達の準備、確認等の声が小さく聞こえている。

メインモニタには、固い顔で所在無げに立っている化粧気の無い女、祐子の顔を映している。

酒井「——こんなにお店広げちゃって……。中継車だけで充分やれるって言ったのに」

仙童「……」

年恵「(インカムマイクに)準備出来たら声下さい」

酒井「大体でいいんだよ。どうせ暗くなって明かり仕込まないと判らないんだから」

年恵「(仙童に／目合わせず)準備オーケーです。テストお願いします」

仙童「あの子なんての?」

年恵「矢野さんです」

仙童「撮影部の助手?」

酒井「照明のチーフ」

仙童「(マイクに)えー、矢野さん、それじゃ悪いけどダミーでお願いします」

画面内祐子「(手にした紙を示し)これ読めばいいんですね」

仙童「そうです。3ブロック目に入ったら、こっちに入って」

画面内祐子「了解です」

仙童「テスト」

年恵「テスト参ります。5秒前。4、3、2、1——Q」

画面の祐子、緊張した顔で、棒読みに原稿を読む。

画面内祐子「(棒読み)人知れず朽ちていく廃墟。その廃墟の姿は、この日本が通りすぎてきた時代の空気そのものを残すタイム・カプセルかもしれません」

画面切り替わり、祐子の背側から洋館の建物を見せる。祐子、そこに向かって歩きだす。

画面内祐子「(時折言葉を嚙む)生中継でお送りしている、シリーズ日本の廃墟探訪、今夜は、ある彫刻家のアトリエだったこの廃墟からお送りします」

ドア前まで来た祐子、扉を開く。と、廃屋内に外の明かりが差し込み、カメラを従えた祐子が入ってくる。室内のカメラ、回り込みながら祐子を捉える。その動きをモニタで見ながら酒井――

酒井「(呟く)違うだろ振り込みのタイミング――」

祐子、原稿を読もうとするが――、手書きで汚く書き換えられており、眉を顰めながら必死に判読。

祐子「(呟く)読めないよこんなの……」

仙童「(振り向かずまま)そのまま読んで」

祐子「(やや苛立ち、読む)彫刻家の妻だった女は――、悲痛に泣き叫びながら森の中を走り、このアトリエに来ました」

手元の原稿の文言が異なる事に、不審の表情の年恵。祐子「――え……、彫刻家の妻はこのアトリエで、既に死体となっていた彫刻家とその愛人を発見し、自らも命を絶ったのです――」

声無くざわめく、中継スタッフ達。不安の眼、眼。

酒井「仙童さん、原稿違うんじゃない？ これはニュース・ジャンクションの中継でしょ。心霊番組なんかじゃない」

仙童「大体こんな感じでいいよ。カメラの動きの確認だけして。あとは局アナ来てから――」

仙童、モニタに浮かぶ祐子の顔を凝視。

祐子、上方を見上げ、恐怖に表情を強張らせている。酒井「矢野どうしたあ？」

祐子、眼と口を一杯に開き――、ある一点を凝視したまま硬直している。スタッフ達、口々に声をかける。

仙童、振り向いて祐子の視線の先を見る。
ロフトの暗い翳があるばかり。
ドンという音がして、見ると祐子が床に倒れていた。
騒ぎになる室内。

○廃屋／PM 4:15

バッテリーライトでロフトを照らし、眼を凝らす仙童。
そこに、半壊した白い顔の彫刻が散乱している。
まるで沼から無数の人間が顔だけ浮べているかの様。

仙童「――」

梯子階段を降りてくる仙童。
広間の片隅に毛布が敷かれ、祐子が横たわり、年恵
が介抱している。

年恵「何かありました？」

仙童「顔の彫刻だけだ。矢野さんは？」

年恵「寝てます。脈も普通ですけど――、東京返します？」

酒井「――ダリが憑いたかな？」

年恵「ダリって何です？」

酒井「ヒダル神とかダルとかダラシとか、色々名前はあるけど、
山の中歩いてると突然憑りつかれて動けなくなるという」

年恵「へえ。ただダリってんじゃないんですか」

酒井「そのダルイとかカッターいとかの語源になった」

仙童「局アナは何時の入り？」

年恵「四時なんですけど、遅れますね」

仙童、ロフトに振り向き、祐子を一瞥して酒井に

仙童「さっきのテスト、V回してた？」

酒井「回してましたけど」

仙童「こっちのカメラ、振り込み前の画（え）、見せてくれる」
酒井、VTRを操作。サーチ戻され――、廃屋内を

広く撮った画面になる。

仙童「そこ止めて」

フリーズになっているモニタ画面に食い入る様に見

入る仙童。

仙童「あの子は何かを見つめていた……」

年恵「(小さく) えっ……」

仙童「上の方——、あのロフト……」

酒井「勘弁して下さいよ仙童さん。さっき見て何も無かったんでしょ？ 明かり当ててないんだから何も映ってないですよ」

しかし、年恵と酒井もモニタを凝視。

仙童「——何も、映っていない、か……？」

年恵「——(息を呑む)」

酒井「何よ何よ」

年恵「いえ、あの——、なんかここ……」

暗く落ち込んだロフトの翳の中に、極く僅かにぼやけて見える、人の顔。人が立っているには不自然な位置。

年恵「ここ、顔みたいの見えませんか？」

仙童「——こんなところには、彫刻の顔は無かった筈だ」

冷え冷えとした空気——。

と、いきなりモニタ、暗く落ちる。酒井が切った。

酒井「やめてくれよ。今夜の中継、下らない心霊物の茶番にするつもり無いからな。そんな番組だったら俺は受けない」

ドン ドン ドン——。ドアを叩く音が響く。

びくっ、となる年恵。

年恵「何……？」

再び叩かれるドア。仙童立って、ドアに向かい——開けてやると、若い女がそこに立っていた。

美姫「すみませーん、遅れちゃいましたー。アナウンス部の後藤です」

安堵する年恵。

仙童「演出の仙童です。取り敢えずじゃあ、こっち入って」

美姫「ホントに申し訳ないです。関越混んじやあって——」

美姫、廃屋内を進むと——、横たわる祐子を見て

美姫「！ あの人、どうしたんですかっ？」

年恵「寝不足——で倒れて……」

美姫「はぁ……。 (屋内見直し) 何かここ、怖いですね。や、あ

たしちよっと普通の人以上、その、感じるみたいで……」
わざとらしく大きな溜息をつく酒井。

○廃屋／PM 4:38

調整卓の近くに座り、原稿を小さく音読している美
姫。AD達が、ロフトから顔の彫刻を幾つも下ろし
室内に配置している。

仙童「(美姫に)ここからの中継は、7時39分からの7分間。
スタジオとのやりとりはふた言くらいです」

美姫「判りました」

キヤメマン「(ヴェウファ覗きながら)あと、その辺にも置いて」

酒井「演出過多じゃないんですか? そこにあるものそのままを
撮るべきじゃないんですか」

仙童「少し位置を変えているだけだ」

酒井「——仙童さん、制作二部に居た時、歌番組なのに魚眼レン
ズで歌手の顔撮らせたんでしたよね」

仙童「——」

酒井「私がTDだったら絶対そんな画、撮りませんよ」

仙童「大丈夫。二度と歌番組なんかこっちに回ってこない」

酒井「——仙童さん、テレビ向いてないんじゃないかな」

仙童「そう、かな」

酒井「仙童さんの番組は、仙童さんというたった一人の視聴者を
満足させる為に作られてる。違いますか」

仙童「マスターベーションだって言いたい訳だ。電波に乗せて大
勢の人に見せる必要がないと」

美姫、クスツと笑う。

仙童「——読めた?」

美姫「あ、何とか。ええとすみません、ちよっと判らないんです
けど、この彫刻家とその愛人は、心中したんですか?」

仙童「無理心中なのか、或いは殺人なのか、真相は判らない。で
もそうだな、スタジオの方からその質問出そうだから、終
わりの部分、書き直します」

美姫「(見直し)やっぱりここ、悲劇があったんですね……」

酒井「余計なもの、見なくていいからね」

美姫「余計なもの……？ ああ、顔とか？」

暫し黙る一同――。

年恵「――なんで、顔なんですかね……？」

酒井「何が」

年恵「あ、心靈写真とかもそうだけど、霊って、顔だけっていうのが多いじゃないですか」

酒井「無理矢理見てるんだよ。木の葉の翳とかさ、さっきのだってフレアの形だよ。見ようと思うから見えてしまう。ロールシャハ・テストみたいなもんだって」

美姫「それだけ、かなあ……」

仙童「じゃあ、外の方、見ておいて下さい。夜になるとここ、真っ暗になるから」

美姫「全国生放送でコケるところ、見せたくないです（苦笑）」

美姫、出て行く。

酒井「――霊が見えるとかっていう奴、潜在的に優越感があるの見え見えだから嫌いなんだ……」

年恵「――（惘然）」

撮影スタッフ、黙々とテストをしている。

ロフトには新たに間接照明が仕込まれている。

○廃屋／PM 5:45

モニタでは、暗くなってきた廃墟に照明が炊かれ、

中継の準備が進められているのが映っている。

年恵は携帯のボタンを無心に打っている。

酒井「（受話器を耳にあてながら）ここ、携帯通じないだろ」

年恵「メール打ってるだけです」

酒井「……。（電話に）あ、こちらTVXの中継なんですけどね、MASCOOTの回線がネゴしなくて。――はい。ちょっとですね、TRCの方で調整を――、はい、そうです（以下オフで技術的会話続く）」

カメラマンも休んでいるらしく、モニタは夕暮れの廃墟の風景をそれぞれ映し出している。

仙童「——何で顔なのか……」

年恵「（顔を上げず）また霊の話すると、酒井さん怒りますよ」

仙童「人間の顔ってのは、そもそも怖いものかもしれない」

酒井「（電話に）はいよろしくー（電話切り）」

仙童「認知心理学的には、人の顔というのはそれを見た時、それが誰であるかを認識出来るというクオリアを以て人間の心というものを説いている——」

酒井「マイクロが繋がらない。今日の中継は呪われてるな」

仙童「人の顔の認識は、右脳後部の舌状蝸という部位の機能による。専用の部位があるという事は、人にとって顔とは何か特別の意味を持っているのかもしれない——」

年恵「それが、心靈写真の△顔▽と、関係してるんですかね」

モニタの一台に、東京のスタジオの映像が映った。
バトンが下がり、照明がセットされている。

酒井「おっと回線来た」

三人、モニタに見入っている。

酒井「——昔は生中継自体がイベントだったけど、今じゃ携帯で動画も送れる時代だからなあ」

年恵「それを言ったら、ニュースそのものだってネットで好きな時に見れますし」

酒井「みんなが一緒に同じものを見る、っていうのは時代遅れって奴なのかもしれない……」

年恵「微妙ですね。結構若いモンで普通にテレビ好きですけど」

仙童「——（何かを想っている）」

○廃屋／PM 6:08

割れた姿見の前に椅子を置き、入念にメイクをしている美姫。無心に己の顔を整えていく。

その近くに、横たわっている祐子——。

年恵「（資料をめくりながら）彫刻家の愛人で、18歳だったん

だ……。なんかすごく爛れてるって感じだわ……」

モニタには、照明で照らされた森を映しだしている。

酒井「こんな山の中にアトリエ構えるから、俗世間と遮断されておかしくなったんだろうね」

仙童「——山は今でも、神聖な場所なのかもしれない……」

酒井「昔、山自体が信仰の対象だったんですしね。何だっけ——『山々の奥には山人住めり……』」

仙童「——柳田國男か」

酒井「『美しき女一人ありて、長き黒髪を梳（くしけず）りて居たり。顔の色極めて白し……』」

意外、という顔で酒井の顔を見る年恵。

仙童「酒井君、詳しいんだな」

酒井「一応民俗学専攻だったから。天狗ってのも、最初に日本書記に書かれているのは、音をたてて落ちる流星だってはつきり書いてある。それがどんどん擬人化されて、妖怪とか魑魅魍魎になってったんですよ」

仙童「——成る程、君は井上円了的な立場をとる訳だ」

酒井「——心霊現象なんて、人が先に怖がるから生まれる。確かに僕はその見方に与しますね」

議論を聞き流しつつ、化粧を続けている美姫。

と——、その向こう、横たわる祐子の臉が、ゆっくりと、開いていく。が、誰も気づいていない。

仙童「——魑魅魍魎のへ魑魅は、山林に棲む化物の事だったな」

酒井「須玉（すたま）ですね。そうです、人面鬼神の化物——（

あ、となり）人面——、顔、か……」

戦慄した年恵、何か気配を感じ振り向く。

美姫、黙々と化粧を続けている。

眼を開いている祐子、年恵の位置からはそれは見えない——。

廃屋内に点々と置かれた、顔の彫刻——。

年恵「……」

化粧を続けている美姫、執拗にパフで顔を叩いている。その顔を映す、やや曇り割れた鏡——。美姫の背後の情景が少しづつ変わっていく——。

美 姫「——（凝視）」

そこに映っているのは、廃屋ではなく、真新しい状態のアトリエ——。

美 姫「え……」

鏡の中に、男が過る。

彫刻家が背を向け、粘土を彫塑する作業を再開する。

美 姫「——（凝視）」

年 恵「やっぱり——、いるんじゃないんですか？」

酒 井「何が」

年 恵「人の顔をした——、その、何か——」

酒 井「（ややキレて）さっき僕が言った話、もう忘れたのか？
そういうのはみんな人の恐怖の中で生み出した幻影なんだ
って！」

鏡の中の光景を凝視している美姫。

と、美姫のすぐ傍らに誰かが立つ。

ビクツとなる美姫。だがそれも鏡の中の存在。

それは——、少女の後ろ姿。愛し合う者同士、寄り
添う二人の背。

美 姫「——（眩き）あたし……、こんなに見える人だったんだ」

美姫は、憧憬の眼で二人に見入っており——、手に
していた化粧品のを床に落とす。

と——、その音に気づいたかの様に、鏡の中の二人、
美姫の方に、ゆっくりと振り向き始める。

美 姫「——！」

翳に落ち、見えない顔が美姫をじっと見つめ——

美 姫「やだ……、やっ、やだ……」

椅子を蹴倒し、転倒する美姫。

ガシャン！ 鏡も倒れて割れる。

年 恵「どうしたんですか？」

仙童は、冷徹に美姫を見つめている。

美 姫「い、今あの——。いえ、すみません五月蠅くして——。（
衣服整え）現場入ります」

美姫、そそくさと片付け、出て行く。

年 恵「——なんか見た、んですけどね……」

黙っていた酒井——、

酒 井「——仙童さん、この中継、仕込んでますね」

年 恵「えっ？」

仙 童「……」

酒 井「いや、別に幽霊役の役者を仕込んだとまでは言わない。だ
けどここに来て早々、いきなり原稿を差し替えてスタッフ
に怪談の因縁話を聞かせて空気を作る。VTRに映っても
いないところに顔が見えるかもしれないと暗示して、まん
まと翳の中に顔を見つけさせる」

年 恵「……」

酒 井「そもそもが、こんな昭和の時代を象徴なんかしやしない洋
館から生中継する必然なんて無かった筈」

仙 童「——（薄ら笑みを浮べる）」

酒 井「テンションが最も高まった時に、あんたは何か一押しすれ
ばいい。廃墟中継はパニック中継へ変異する」

仙 童「俺は何も言っていないよ」

酒 井「そう。けど未必の故意がある。暗示という誘導で、この閉
鎖されたグループに共同幻想を抱かせる。これは一種のプ
ロバビリテイの犯罪だ」

年 恵「プロバ……？」

酒 井「確率の事だよ。直接手を下さず、こうすれば人が死ぬかも
しれない、という確率に賭けて作為をする事だ」

仙 童「（苦笑）犯罪、か……」

酒 井「笑い事じゃないですよ。仙童さんはこの中継を最初からぶ
ち壊そうとしてる。何故なんだ。自分がテレビに向いてい
ないから全てを崩壊させていなくなるうというのなら、そ
んな道連れになるつもりは、私にはない！」

重い沈黙。

祐子は、再び目を閉じている——。

画面内美姫「（小声で呟き）——彫刻家の妻は、悲しみの声を上げながらこの森をひた走りました。愛する夫の姿を探して。しかし森で妻を待つ夫の姿はありませんでした——」

モニタに映る、虚ろな顔の美姫を見つめる仙童。

年 恵「スタジオ、本番5分前入りしました」

モニタの一つが、既に立ち位置にスタンバっている司会者二人を映し出している。

酒 井「（インカムにややキレて）違うっつってんだろ！ 5カット目頭は振り込みだって！」

試行錯誤しているカメラの画がモニタに。

仙 童「人間の恐怖とは、扁桃体で感じ取る情報だ……」

酒 井「無駄口やめてくれないですかね」

仙 童「恐怖という感情は伝播するんだ……」

酒 井「いい加減にしてくださいよ！」

年 恵「本番、3分前」

と、スピーカーから何かトラブルの声。

酒 井「どうした？ 何やってんだよ。時間無いんだぞ」

スタッフ1「（オフ）2カメラのアシスタントがいなくなっちゃっ

って——」

酒 井「いなくなったあ？ 何だよそれ？ 捜せよ！」

スタッフ1「（オフ）それでですね、えー、こっちのスタッフ、取り敢えず捜す為、持ち場離れます。5分間だけください」

「くそっ」とインカムを外し、乱暴に机に置く酒井。席をそっと立つ仙童。

年 恵「番組本番5秒前、4、3、2——」

モニタ、音楽と共に映し出される番組オープニング。

画面内司会者「今晚は、今週のニュースをまとめてお届けするニュース・ジャンクション、司会の日下部四郎です」

画面内アシスタント「明石博子です。今夜も盛り沢山の内容でお届けします」

仙童は、顔が散乱する広間中央に立っている。

酒 井「仙童さん！ こっちにいてくださいよ！」

仙童、構わず、祐子の前に来て見下ろす。

仙 童「——まるで死体みたいだ……」

酒井「(オフ)見つからないってどういう事だよ！」

○廃屋／PM 7:25

スタジオの状況は、音声を絞られ映像だけ流れている。重い沈黙の三人――。

モニタに映る美姫の様子がおかしい。落ち着かず、何かに脅えている様子。

酒井「――大丈夫なのかこの女子アナ――」

年恵「(インカムに)後藤さん。聞こえてます？」

画面内美姫「え、あ、はい……」

年恵「どうしました？ 何かありました？」

画面内美姫「あの――、いえ、大丈夫です」

酒井「こっちがちゃんとやったって、顔出してる奴がこれじゃし
ようがないじゃないか！ 何なんだよ全く！」

仙童「――」

酒井「――仙童さん――、思う通りになってるんですね？」

年恵「120秒前――。あの、このまま中継入っちゃっていいんですか？」

仙童、おもむろにトークバックで

仙童「後藤さん。何を見ました？ 何か見たんですよね？」

画面内美姫「――(小さく)えっ……」

仙童「あなたはへ見えるV人だ。何かをこの廃墟で見た筈だ」
じっと俯く美姫。

年恵「90秒前です」

画面内美姫「――彫刻家の奥さんが、夫と、その愛人の死体を発見
した――っていうのは――、うそです……」

酒井「あんたら何やってんだ本番前に！ あんたおかしくなった
のか？」 テレビ屋なんだろう！」

仙童「(酒井に)テレビで、同じものを一斉に見るテレビという
媒体で、何を見せるのが相応しいと思う？」

酒井「――(慄然)あんた……」

モニタに映る美姫、涙を零し始める。

画面内美姫「――奥さんは――、自分のその目で見てしまったんで

す……。夫が誰を本当に愛しているのかを……」

仙童「1キヤメ、後藤さんのアップ」

バストサイズのまま、画面動かず。

仙童「どうした。アップだ」

画面内美姫「（構わず／虚ろに）——彫刻家の妻は、自分で夫と、

その若い愛人の頸にノミを突き刺して——、自分もまた命を絶ったんです……」

年恵「60秒前。1キヤメさん？ 佐々木さんどうしました？」

酒井「何やってんだよ」 おい亀井ちゃん！ 本田！ 浅野」

スピーカーからは、誰の声も聞えない。

年恵、はっとなって振り向く。

廃屋内キヤメラのスタッフ、いない。

そして——、祐子が半身を上げ、ぼうっ、と翳の中に白い顔を浮かばせている。

年恵「（恐怖）」

ゆっくりと、年恵の方に向く祐子の、顔——。

年恵「あたしもうヤダ」 こんなの有り得ない」

と、画面の美姫、何かを見たらしく、目を見開く。

迫り来る恐怖に激しく顔を歪めていく。

仙童「（時計をチラと見）30秒前」

酒井「あんたまだやるつもりなのか」 何が起ってるのか判って

んのかよ」

仙童「最初から作為なんてなかった。だが、顔が見え始めた時、

はつきり判ったんだ。ここにいる何かが中継される事を望

んでいると。俺にそれを果たせと無意識に働きかけている」

酒井「（慄然／サツと見直し）ここにいる、何か、って……」

仙童「恐怖は伝播する。言語ではなく、恐怖という強い感情こそ

が何かを伝えるんだ……。このテレビを同時に見ている人

間の群れ——そう、人間はどんなに進化したって所詮群れ

で生きる動物だ」

ザザツ——。床を走る無数のザザ虫の群れ。

モニタには、目と口を極限にまで開ききって痙攣し

ている美姫の顔。

仙童「ハ顔Vが恐怖を生み出す。その恐怖が、人間を何かに変え

るんだ。それは狂気なのか、俺にも判らない。だが確実に、何かに変える。どうだ。これこそテレビじゃないか」

酒井、インカムを外し、立ち上がる。

酒井「――神にでもなったつもりかよ」

出て行く酒井。

年恵「酒井さん！」

酒井の背と仙童を交互に見て――、自分も駈けだしていく年恵――。ドアが閉まる音。

スタジオでは廃墟探訪の前振りをしている。

時計の秒針が頂点に近づく。

仙童「神だと？俺は神の意志に仕えているのか……？」

モニタの一つに大写しになる、仙童の顔。

カメラを担ぎ仙童の前に立っている祐子。

美姫と共に、恐怖の顔が画面に浮かんでいる。

仙童「はは……、恐怖だ……。俺の顔こそが恐怖した顔だ……」

秒針が頂点に届こうとしている。

モニタ内司会者「では、廃墟にいる後藤アナを呼んでみましょう。

後藤さん？」

中継開始。

パチパチと交互に切り替わる、美姫と仙童の恐怖する顔（仙童がスイッチングしている）

その内に、仙童の背後の△閨△に、次々と△顔△が徐々に浮かび上がっていく。

△顔△は仙童の背後から画面に近づいていく。

仙童「――△△（背後の気配に気づき）――来る！来る！顔が
！顔があああああっっっっ！」

○廃屋／そこが再び廃屋となる程の未来

埃を被ったモニタ群。無人の廃屋内。

N 「恐怖とは、扁桃体で認識する情報です。あなたは今、それを受け取った。あなたの中で、何かが変わっている筈です」

了